The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジャーナリズムの修辞学～バングラデシュの新聞記事分析
Author(s)	北田, 信
Citation	外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 285-295
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79379
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジャーナリズムの修辞学〜バングラデシュの新聞記事分析

Rhetoric of journalism: Analysis of Bangladeshi newspaper articles

北田　信

Abstract

The media, such as newspapers, TV news etc., aim at contextualizing daily happenings, through presenting them in schematized forms, in which various rhetorical devices are used. This paper analyzes the method of usage of rhetorical devices adopted in articles of Prothom Alo, one of the most popular newspapers of Bangladesh, written in Bengali language. The vocabulary of Bengali language contains a great number of Sanskrit loanwords, in spite of the fact the majority of Bangladeshi population are Muslim. The result of the analysis suggests that this linguistic discrepancy might possibly influence Bengali speaking readers' modality of perception, which could eventually cause nuanced shifts in their comprehension of Islam.

キーワード：ベンガル語、ジャーナリズム、修辞学

略語　B. Bengali Skt. Sanskrit

1. はじめに

記号学・メディア論を研究する石田英敬は、著書『記号論 日常生活批判のためのレッスン』(2020) のなかで次のように述べる。

「新聞やテレビ・ニュースは、いうならば日々更新される世界の出来事の百科全書であり、その一節を読んで私たちは〈世界の秩序〉とコミュニケートしていることになります。不動の紙の秩序とは異なって、世界の秩序は無数の出来事によって日々変化するものですから、もし世界の出来事を全部記録して報道するとなれば、世界と同じほど巨大な新聞やテレビ・ニュースが必要となるのかもしれません。それは、地球と等倍の地図をつくるという、ボルヘスの物語よりもさらに不条理な企てを意味することになるでしょう。そこで行われるのが、文脈化と項目化による整理です。世界の重要と見なされる出来事の物語はカテゴリー化され、見出しが付けられて分類され、項目化されます。」(石田2020: 465)

なるほど毎日、世の中で起こる現象は無限であるから、それをすべて記述しつくすことは不可能であり、それらの無数の出来事の中から有限の数の出来事を取捨選択して伝達す

ることになる。どれを選択するかは伝達者の裁量や価値観に任されている。宇宙に生じてくる無限の森羅万象に対して、それを把握しようとする人間の知覚キャパシティには限りがある。それは無数の魚の群れを網で捕えようとするようなものであって、一定の大きさと形状を有する魚（出来事）のみが、人間の知覚の網の目に引っかかるのである。多くの小魚は網の目をすり抜けていく。また、知覚の網は個々の人間によって種類が異なっており、或る人の網に引っかかる魚は、別の人の網をすり抜けていくかもしれない。網、つまり知覚のパターンは個々人により、またその人が属する集団によっても違ってくる。果てしない宇宙の中からどの部分を切り取ってきて、それをどのように提示するかは、認識する側の知覚様式に依存するのである。

日々世の中で起こる出来事は無数であり、それらの全てが一回限りの現われであり、どれ一つとして他と同じものはないが、新聞記者はこれら雑多な出来事群の間に認められる共通の性質にもとづいて類型化したり、図式化したりして記事に纏めていく。記者は、出来事の経緯と詳細を有りのままに記述するだけでなく、記事のところどころで、それらを読者に分かりやすく図式化し、文脈づけて提示するという作業を行うが、その際に、比喩的表現や象徴的表現を用いることが多い。あるいは修辞的な表現、たとえば対句などを効果的に用いたりする。それらの表現法を用いて、具体的な個別の事象から離れ、一段階上の視点から俯瞰してみせるのである。この作業により個別の事象は抽象化され、それと共通の特徴を備える他の事象群と一緒に取りまとめられて、社会的文脈の中に位置づけられる。上に引用した石田（2020）の言葉は、こういうことをいっているのだろう。同様のことを外山滋比古は『思考の整理学』において次のように言い表している。

「ものを考えるに当たっても、ことわざを援用すると、簡単に処理できる問題もすくなくない。現実に起こっているのは、具体的な問題である。これはひとつひとつ特殊な形をしているから、分類が困難である。これをパターンにして、一般化、記号化したのがことわざである。」（外山2020: 188）

物事を一般化・記号化するために用いられる言語様式、つまり比喩法その他の修辞的表現は、言語や社会集団によって異なっている、ということは良く知られたことがらであるが、その相違が人々の世界認識に何らかの影響を与えているのではないか。本論考では、このような問いを立てて、バングラデシュで発行されるベンガル語の新聞記事を材料として見ながら考えていく。

2. 分析に用いた新聞

Wikipedia英語版 “List of Bangladeshi newspapers” の項[1)]によれば、バングラデシュのベンガル語日刊紙として最大読者数を有するのは Bangladesh Protidin（Bāŋlādeś Pratidin）『バ

ングラデシュ毎日』紙であり、二位は Prothom Alo（Pratham Ālo）『最初の陽光』紙である。私の印象として、Prothom Aloのほうが、ニュースの分析が詳しく、描写が豊かで読み物として面白い。本稿は、新聞記事における修辞を分析しようとするものであるから、Prothom Aloに掲載される記事を用いた。将来的には複数の新聞を比較し、各紙の傾向を分析したりすることも考えているが、ここでは、この一紙にとどめておく。現段階では、新聞記事における比喩表現の使用の分析が、ジャーナリズム研究の手法として果たして本当に有効であるか、心もとないからである。

なお、私はこれまで南アジアの諸言語による古典文献の研究に携わってきた者で、現代社会の分析については門外漢である。従って、現代バングラデシュの社会動向や政治動向を、該当する学問分野の専門的方法論に基づいて調査するのではないことをお断りしておく。本稿では、あくまで新聞記事を言語表現として見、文献学の手法を当てはめて分析するにとどまる。

2. コロナウイルス

本稿を執筆した2020年には、コロナウイルスの蔓延によって世界が様々な困難に見舞われた。バングラデシュでも自主隔離が行われた。2020年10月現在、バングラデシュにおいても感染者数は増え続けている[2)]。経済と国民の日常生活は大打撃を受けた。ここで扱う記事も、このような状況を背景としている。

3.「消毒液で手を洗い、賄賂を受け取る」

象徴的表現が効果的な力を持ちえた一例として、ある地方で起こった収賄事件の記事を挙げる。残念ながら、Prothom Alo紙の当該記事をプリントアウトしたものを紛失してしまったので出典を示すことができないが、内容は次のようなものであった。

或る地方で、警察官が、夜更けに、賄賂を受け取るという事件が発生した。その際に、消毒液で手を消毒してから賄賂を受け取る姿を隠し撮りした動画がネットで拡散され、人々の顰蹙と怒りを買った。

何か特別の便宜を図ってもらった際に心づけを渡すことは、南アジア社会に広く行き渡っている習慣である。しかし、それが度を超すと収賄となる。警察官に賄賂を与えて見逃してもらうことは、残念ながら日常茶飯事であり、新聞の記事とするには足らない。毎日この国のあちこちで繰り返される無数の収賄が、いちいち報道されることは、ない。この事件が新聞で報道されるに値するほど重大であると記者が判断したのは、おそらく動画が、コロナ危機下での公務員の堕落を象徴的に上手く切り取ってみせたからである。

ロックダウウン下、人々はお互いに接触を避け、経済的活動が停止した結果、夜の街は人影なく真っ暗である。賄賂のやり取りは“手を汚す”ことであるが、それを、わざわざ

消毒液で手を消毒したうえでやって見せた、という矛盾の構図が、社会的病理を見事に象徴している。ここでは、目に見えないウイルスの害毒が、世に蔓延する汚職の比喩となっているのである。死をもたらすウイルスを恐れるが、しかし賄賂として金銭を手渡しで受け取る欲求には打ち勝てない、という姿が浮かんでくる。

この例においては比喩的表現が、映像言語を用いて行われている。このように、比喩表現は、強い問題提起力や告発力を持つことができる。比喩の力によって、地方警察官が手を染める他の無数の小さな収賄行為とさほど変わらないこの事件が、一段上の意味レヴェルに引き上げられ、収賄問題に結びつけられた記号として機能し始めた、といえる。

4.「国境を渡り、家族に会いに」

コロナ危機対策として国境封鎖が行われたことにより、多くの人々が非常に困難な状況に陥った。Prothom Alo紙2020年8月29日掲載記事「国境を渡り、家族をなすために来たインド人女性逮捕。子供と共に逮捕されたインド人女性S[3)]」（Sīmanta periẏe saŋsār kar'te ese bhāratīẏa nārī greptār: santān saha greptār bhāratīẏa nārī S）では、バングラデシュに帰省中、国境封鎖によってインドに戻れなくなったバングラデシュ人出稼ぎ労働者の夫に会うために、インドからバングラデシュに不法越境したインド人女性の陥った窮地を報じる。この記事の第１段落の、事件の概要を述べる部分を、原文の表現を適宜再現しながら、下に簡単に要約する。

バングラデシュ・クリグラム（kuṙigrām）管区出身のOは、インド・デリーに出稼ぎに行き、一人の女性と家庭（saŋsār）を築いていた。7月にバングラデシュに帰省し、ロックダウンのせいでデリーに戻れなくなった。しかしインド人妻Sは、夫を探して、子供を連れてバングラデシュにやって来た。国境を越えて、バングラデシュに来て、家庭（saŋsār）を持ち始めた。しかし、結局、バングラデシュ国境警備隊（Border Guard Bangladesh）は、不法入国の咎により、この女性Sを勾留した。

ここで、「家庭」と訳したsaŋsārは、サンスクリット語彙saṃsāraである。saṃsāraとは「輪廻」を意味するが、ベンガル語の日常的用法では「現世的な絆、人間関係やしがらみ」を指し、具体的には「婚姻によって生じる家庭、妻子供」のことを言う。つまり、日本語で「輪廻」と言うのよりももっと現実的で具体的に、家族の絆のことを指す。ヒンドゥー教や仏教など南アジアの伝統的な宗教観において「輪廻」とは、現世的な活動つまり社会の一員として生活することを意味し、その根幹に、婚姻して妻子を持って家長となることがある。輪廻を離れること、つまり「解脱」（Skt. mukti, mokṣa）とは、具体的に言うと、妻子を捨てて出家者（sannyāsī）となることである。

ベンガルの誇る映画監督サタジット・レイの代表作「大地の歌」のベンガル語原題Apūr Saŋsār は「オプーの世界」などと訳されたりするが、厳密に訳すと「オプー（主人

公の名）の輪廻」つまり「オプーを取り巻く現世的しがらみ」となる。映画三部作では、オプーが子供時代、家族に次々と死別し、ひょんな切っ掛けから期せずして美しい女性と結婚するが、間を置かずして死別し、天涯孤独の身となって放浪するも、あとに残された一人息子と再会する、という、まさに、しがらみに捕らわれたり解き放たれたりを繰り返す流転の人生が描かれる。このように、本来、抽象的で哲学的な観念を著すはずの用語が、実際的な言語生活の中で意外に具体的で生々しい臭いを帯びることはよくあり、そうした用法に触れることが古典語ではなく現代語を学んだり、現地を訪れて会話したりする際の楽しさのひとつである。

ここでsaŋsār/saṃsāraのニュアンスにこだわったのには理由がある。この記事の叙述のそこかしこに、上で説明したような文化的背景が見え隠れするからである。具体的な表現を見ていこう。

夫O（名前から判断するとムスリム）は、4年前にインド・ヴィザを取得して、デリーに出稼ぎに行く[4]。そしてインド人女性S（名前から判断すると恐らくヒンドゥー）と知り合い、婚姻関係を結ぶ。6月にOはバングラデシュに帰省し、ヴィザ期間が切れてしまい、ロックダウンのせいでインドに戻れなくなった。7月25日に妻Sは、両国の仲介業者（dālāl）の助けにより、国境を越え、バングラデシュに不法入国する。ところがOには第一番めの妻K（名前からするとムスリム）がいた。Sをめぐって、KとOの間に喧嘩が絶えない。このことが近隣住民の知るところとなり、警察の耳に届くことになった。（記事第2段落の記述による。）

Sは母語のヒンディー語で次のように語った、として、記事は地の文でSの言葉を三人称（「彼女」）で再現する[5]。彼女は、生まれた土地と家族への愛着（māẏā）を放擲（tyāg）して、バングラデシュの夫の家に来た。3歳の息子がいる。ここでこそ、家族（ghar-saŋsār）を為して暮らしたいと彼女は願う。

記事はさらにOの言葉を、やはり三人称で再現する。OはデリーでSと知り合い、恋愛の絆（premer samparka）が築きあがった（gaṙe uṭhe）。４年前にデリーで宗教的見地から（dharmīẏa mate）結婚し[6]、３歳の子供ができた。彼は、この家族関係（saŋsār）を為したいと願う。

現代の標準ベンガル語は、英領植民地時代の首都コルカタの書き言葉を踏襲しているから、サンスクリット語彙を非常に多く含む。それは例えてみると、日本語の新聞の語彙の60～70％が漢語であるという様相に似ている。こうした状態になったのは、英領植民地時代にベンガル語を近代的な書き言葉として整備した人々が、主にサンスクリット語の教養を持ったヒンドゥーの知識人だったことに起因する。ムスリムが大多数を占める現代のバングラデシュでも、標準的な書き言葉は、同じものが用いられている。信仰はイスラームなのに、言語は極めてサンスクリット的なものを用いる[7]、というねじれが、バングラ

デシュの言語文化の特異点のひとつである。

この記事においても、ほぼ“サンスクリット書き下し文”とでも言えるような、サンスクリット的な文体が用いられており、驚いたことに、ムスリム人名をのぞいては、アラブ・ペルシア語彙はまったく用いられていない[8)]。これは、例えば、公的に使用される標準ヒンディー語において、アラブ・ペルシア語彙をできるだけ排して代わりにサンスクリット語彙で置き換え、言語純化する努力を払った後でさえ、かなりの数の日常語化したアラブ・ペルシア語彙をなかなか捨て去ることができない、という状態とは大きな違いである。

夫婦の述懐の言葉にしてもそのことは顕著で、Sが故郷を捨てたことは、「愛着」（māẏā）を「放擲」（tyāg）する、と表現される。サンスクリット語māyāとは「幻影」を意味し、仏教・ヒンドゥー教において、ひとが現世的快楽に対して抱く儚い夢幻を指す[9)]。そしてSkt. tyāgaとは、所有物を捨て、現世を捨てて出家することを指す。Sは、遠く離れた夫に対する「愛慕」（prem）の為に、現世的な「幻影・執着」（māyā）を振り捨て（tyāg）て、国境の彼岸に到達した。ここで「愛慕」と訳したprem（Skt. prema）は、人間的な愛だけでなく、中世ヒンドゥー神秘主義詩では神に対する至上の愛を指すのにも使われたことを指摘しておく。こうしてみてみると、記事の冒頭の「国境を越えて」（simānā periẏe）という表現には、意外な深みが感じられる。このperiẏeは、動詞perāno「超える、向こう岸に渡る」の絶対詞（日本語の動詞連用形に相当する形）である。ベンガル語の動詞perānoは、サンスクリット語の「彼岸」を意味する語pāraに由来する。この語は、般若心経の末尾で唱えられるマントラ「波羅羯諦（はらぎゃてい）」に含まれる「波羅」と同じものである。波羅羯諦とは、彼岸に到達した、という意味である。向こう岸に渡る、という表現は、南アジア文化圏では、しばしばこういった宗教的なコノテーションを持つ。

つまり、言語表現を見る限り、この記事の根底を流れる物語（narrative）は、至高の愛のために故郷・家族という現世的な束縛を捨て、「解脱」あるいは「神との合一[10)]」を求めて彼岸にやって来る、という、インド文化圏で古来繰り返されてきた伝統的かつ原型的な行動パターンである。しかし皮肉なことに、やっとのことでたどり着いた向こう岸には、平安は存在せず、別の現世的なしがらみがあるのだった。男性の跡を追ってやって来たら、男性が別の女性と一緒にいた、という出来事は地上のあらゆる場所でよく起こることであるが、この事件を叙述する際にこのようなパターンを用いたことにより、この事件は一種の神話性を帯び、それがこの事件の悲劇性をより鮮明にしている。この記事を書いた記者が、文学的な表現を工夫してみた、ということであろう[11)]が、それは同時に、バングラデシュの読者達がこの種の比喩と文脈に慣れ親しんでいる、ということでもある。

5. 離欲から還俗へ

つまりベンガル語の新聞記事を言語表現として見る限り、ムスリムが国民の大多数を占

めるバングラデシュにありながら、言語表現は意外なほど非イスラーム的である。同様の状況は、バングラデシュの出版物を読んでいると至る所で観察される。たとえば、バングラデシュ東北のシレート地方のスーフィー詩人達の列伝を扱うSelīm（2018: 66）は、スーフィー詩人・シタロンSufī Śītālaŋ（1800-1889）について次のように述べる。シタロンは、林住（B. banabās = Skt. vana-vāsa）の修行を行っていたが、離欲（B. bairāgya = Skt. vairāgya）の状態を捨て，還俗者（B. saŋsārī = Skt. saṃsārin）になった、と。この記述が言わんとすることは、シタロンは人里を離れてスーフィー修行者としての修行をしていたが、それを断念し、人里に戻って妻帯した、ということである。しかし、この文章において、括弧の中にローマ字転写して示した用語は、全てサンスクリット語彙である。バラモン教の用語「林住」（Skt. vana-vāsa）は、家長が世を捨てて、森林にすんで宗教生活をすることを言う。「離欲」（Skt. vairāgya）は現世的な欲求を捨て去ること。これに対して、「還俗者」（Skt. saṃsārin）は、文字通りには「輪廻saṃsāraをする者」という意味で、ここで言う「輪廻」とは、妻帯生活を言う。つまりこの文章では、ヒンドゥー教や仏教の出家者が森に住み禁欲の修行に励むことを記述する為のサンスクリット語彙が、スーフィー聖者の宗教生活（とそこからの脱落）の記述に転用されているのである。

著者Selīmによると、14世紀にシレート地方の主都シレートが聖者シャー・ジャラール（Śāh Jālāl）によって征服されて以来、シレート地方はイスラームの布教活動の中心となり、多数のムスリムが住み、スーフィー達が活躍した、という。都シレートは、ムスリム信仰の一大中心であった、という。とはいえ、Selīmの上に見るような用語使用においては、スーフィーの意味するところが若干ずれてきているのを見逃すことはできない。確かに、西アジアのスーフィー達も人里を離れて禁欲生活を行ったが、それは乾き切った砂漠や荒野においてではなかったか？これに対し「林住」（vana-vāsa）と言ったとき、喚起されるイメージはシレート地方の、竹藪の生い茂る湿潤なジャングル（熱帯雨林）であろう。そして「離欲をすてて還俗した」と言う表現が言外に含む意味は、おそらく次のようなことだと考えられる。仏教やヒンドゥー教のタントラ思想潮流においては、現世的欲求（Skt. rāga）を否定せず、解脱に到達するための有効な方便（Skt. upāya）として利用する。そこでタントラ修行者は、女性のパートナーを伴い、愛の生活を営む。彼にとり、宗教儀礼としての性交は、修行の核心をなすものである[12)]。したがってタントラ思想においては、精神的自由を達成した偉大なヨーガ行者は、女性と愛の生活を営み、時には、禁欲生活を行う修行者よりも上位に置かれる[13)]。

スーフィズム詩においても、神に対する熱烈な愛と、合一の喜びが飲酒の酩酊になぞらえられ、表向きは享楽主義的な恋愛詩の形式を取る。しかし、一度世を捨てた者が妻帯者の状態に戻ることを、肯定的なニュアンスでは語らないのではないか。このように、「スーフィー」という概念を、ベンガル語という全く異なる文化的背景を前提とする言語（表象

体系）で記述することによって、この概念にかなり大きな改変が無意識のうちに加えられている。こうして無意識的に生じた認識のズレが、社会の様相やその中で暮らす人々の意識に何かしらの影響を投げかけているだろうことは容易に想像がつく。こうしたズレを元に戻そうとして時に原理化への大きな志向力が生じるかもしれないし、また同時に、その動きに逆らう慣性力も大きそうである。バングラデシュ人の宗教観について1978年から1990年までバングラデシュ農村で暮らした経験を語りながら安藤（2019: 79）が、「12世紀ころまで隆盛した大乗仏教は一般的にはヒンドゥー教に吸収されたと言われているが、私はイスラームの中に受け継がれたと思っている」という印象を語っているのは示唆深い。

6. 遠くにいる人がそばに立つ

Prothom Alo紙2020年8月29日の記事「毎週、貧しい人々に食事を与えてくれる方」（Prati saptāhe daridra mānuṣ'ke khāoẏāben tini）は、コロナ禍に加えて、サイクロン「アンパン」が引き起こした洪水によって困窮した2500人の村人のために、ドイツで商売を行う同郷出身のバングラデシュ人篤志家ゴラム・ショロワール（Golām Saroẏār）が出資して、毎週一度、食事を支給していることを報じる。

この記事を書いた記者の言わんとすることは、次の文に集約されている。

Ei durbhog'kāle tẽder pāśe dẽřiẏechen grāmer-i ek prabāsī byakti.

「この飢饉の時に、彼ら（＝コロナ禍で仕事を失い、洪水で困窮する人々）の傍らに立ってくれた（pāśe dẽřiẏechen）。［同じ[14]］村の一人の国外に住む（prabāsī）人物が。」

つまり、遠く離れたドイツに住み、ここに居ない人が、あたかもすぐそばに立っているかのように、困窮した人々に寄り添うようにして、援助を行う。「遠くにありながら誰よりも近い」という逆説的なあり方が、この人物の志の篤さを象徴的に示す。

地元住民のひとりは、これを受けて次のように言う。「国内・国外に（deśe-bideśe）拠点を置く者たちは、このように、自分の、あるいは近隣の村の人々の傍らに立つ（pāśe dẽřāno）べきである」と。つまり、遠くにある者さえもが、困窮した人々のそばに寄り添ってくれるのだから、いわんや近くにいる者は、なおさらそうすべきである、と促すのである。

別の住民は言う。「いかなる目的があってのことではない（kono uddeśya niẏe noẏ）。災難に見舞われた普通の人々の傍らにいてやる（pāśe thākā）ためにこそ、ゴラム・ショロワールは、このプロジェクト（udyog）をなさっているのです。」

ゴラム・ショロワール自身も次のように言う。「人は人のために（mānuṣ mānuṣer janya）。だから災難に襲われた人々の傍らにいてやる（pāśe thākā）ためにこそ、私はこのプロジェ

クトを行うのです。」

「傍らに立ち」「傍らにいる」こと、つまり日本語で言うと「寄り添う」に当たるこれらの表現が、記事の地の文、および二人の住民と篤志家本人の発言の中で繰り返し用いられており、この出来事の核となる言語表現となっている。こういう言語表現があるからこそ、国外在住者（prabāsī）が、この種のボランティア活動を行うことの意義が際立っている。

7. おわりに

以上、バングラデシュの3つの新聞記事を対象に、そこで用いられるレトリックや図式化の手法を分析してみた。特に4.「国境を渡り、家族に会いに」における分析では、バングラデシュの公用語ベンガル語が、極めてサンスクリット的（つまりヒンドゥー的）な言語であることを示し、その言語的性格が、ムスリムが人口の大多数を占めるこの国の社会・日常生活の様々な局面に、無意識のうちに甚大な影響を及ぼしている可能性があることを示唆した。これに類する例を集めて観察すれば、この国の人々の意識の微妙な揺らぎについて知ることができるのではないか。たとえばムスリム聖職者が書く宗教的ジャンルでは、ベンガル語の文章としては例外的にアラビア・ペルシア語の宗教用語が比較的多く用いられる傾向があるが、そういった文章におけるアラビア・ペルシア語彙およびサンスクリット語彙の使い分けあるいは重なり（オーヴァーラップ）を分析することは興味深い課題であろう。

一方、最後の例、6.「遠くにいる人がそばに立つ」で取り上げた言語表現は、出来事の性質を端的に言い表しており、読者の目を惹くのに効果的ではあるものの、バングラデシュ社会の在り方を象徴的に切り取っているとまでは言えない。むしろ単なる修辞上の工夫である。こうした修辞的表現は、新聞記事だけでなく、たとえば政治家の演説などでも、聴衆の注意と興味を喚起するための工夫として使われており、用例を多く集めれば、ベンガル語の言語文化の在り方やそれを用いた社会生活の在り方を見るための良い材料となりうるかもしれないが、本稿ではあまり考察を深められなかったことをお詫びしておく。

バングラデシュの新聞諸紙の記事は、概して事実を脚色なく羅列的かつ簡潔に提示するものが多い印象があり、読み物として面白いと感じられるものは少ないが、例外的にProthom Aloでは各記事の分量が多めで比較的詳しい叙述がなされている。その際には、本稿で取り上げたように修辞的表現が多く用いられ、また事件の背景的な解説が他紙よりも充実している。しかしそれは、Prothom Alo紙の記事においては、書き手（記者や編集者など）の個人的な解釈が、記述の中に紛れ込みやすい、ということをも意味する。この点について、他紙と比較してみることも、今後の興味深い研究テーマになりうる。

注

1) 2020年10月8日参照。周知のとおりWikipediaは参照ツールとして問題がないわけではないから、そのことを考慮して、必要最低限の使用にとどめる。Prothom Alo紙がバングラデシュの代表的な新聞のひとつであることを示すために参照する程度ならば、大きな害はないであろう。
2) 隣のインドに比べ、バングラデシュではコロナウイルスの対策は、比較的うまくいっている、という論調が、真偽はともかく、さまざまな報道でよく見かけられた。例えば日刊紙 Ittefaq (Ittephāk) 2020年6月11日掲載記事「噂やデマをまき散らすのは、罰に値する軍法罪である―情報相」(Gujab bā apapracār chaŕāno śāstiyogya phauj'dāri aparādh: tathyamantrī) (https://www.ittefaq.com.bd/politics/156993) は、アワミ・リーグの政治家で情報相ハサン・マフムード (Hāchān Māh'mūd) の次のような発言を引用する。「コロナウイルスの出現の初期、全世界で、換気装置 (ventilation unit) の不足があった。このため、欧米の国々では、65歳以上の年齢の人々よりも、比較的若い人々に、換気装置 (ventilation unit) によって治療する優先権が与えられていた。米合衆国ではホワイトハウスの前あるいは様々な州でPPE（personal protective equippement 個人用保護具）を求めてデモが行われた。カナダおよび欧州の様々な国々ではマスク不足があった。私たちの国では、この種の不足は生じなかった。むしろ、二日前にはナイジェリアに飛行機を送りバングラデシュから薬品、PPE、そして様々な治療キット (cikitsā-sāmagrī) を運んだ。私たちはこれら全ての保護キット (surakṣā-sāmagrī) をモルジブにも送った。」もちろんこれは、政府側の発言であり、実情は異なるかもしれない。Daily Inqilab紙6月9日掲載記事 (https://www.dailyinqilab.com/article/297712/) は、ロックダウンの効果はあまり見られず、治療体制も整っていないことや、感染者数が激増しているため病院がパンク状態にあることを嘆く。しかしこの記事も、ナイジェリアに治療キットを航空輸送していることに言及している。
3) 新聞記事として公開されているので人権上の問題は生じないと考えられるが、念のために個人名を伏せておく。
4) 職業は石工 (rājamistri)。
5)「Sはヒンディー語で語った」と明記されている。
6)「宗教的見地から」(dharmīẏa mate) とはおそらく、ムスリムは複数の妻をめとることが宗教法で許されている、ということを言うのであろう。
7) ただし、小説などでは、コルカタ（インド国・西ベンガル州）のベンガル語では用いられないような種類のアラブ・ペルシア語彙が使われる、と聞いたことがある。また、イスラームに関する宗教的テキストでは、当然のことながらアラブ･ペルシア語彙の宗教用語が多くなる。とはいえ、例えばイスラームでさえ、サンスクリット語彙のdharma（つまり漢訳仏典で伝統的に「法」とか「達磨」などと訳された語）と呼ばれる。近代のヒンドゥー教徒知識人が、英語 religion の訳語としてdharma を当てはめたことを踏襲しているのである。非常に微妙で些細なことのように思われるが、このようにイスラームの宗教的概念にサンスクリット語彙を訳語として当てることが普通に行われており、そのことは、バングラデシュのムスリム庶民の宗教意識や宗教生活の上に、微妙な影を投げかけているのではないか。
8) 行政区分「管区」を表すペルシア語彙 jelā/ẓil‘ah が、唯一の例外である。
9) 仏教･ヒンドゥー教においては、māyā は解脱の邪魔となるもので、除去されるべきものであるが、近代インド・アーリア諸語では、必ずしもネガティヴなニュアンスを帯びないことがある。例え

ば現代ネパール語では、māyā は「愛」を意味する最も一般的な語であって、ポジティヴなニュアンスで用いられることが多い。女性名になったりもする。

10) ヒンドゥー教神秘主義（バクティ）的宗教詩においては、神を切望する修行者が、男性の恋人に恋い焦がれる女性として描かれる。ベンガルの伝統歌謡において、この種の恋慕を描いた歌詞は非常に多く、そしてそれらは常にこのような神秘主義的解釈を許す。つまり、この種の「見立て」はベンガルの言語文化と生活に浸透した発想である。

11) ただし、当事者男女の発言を再現する、という形式をとって。記者の心に強い印象を残したからこそ、記者は記事の中でそれを再現したのである。

12) 村瀬（2017）第五章を参照せよ。

13) サンスクリット恋愛抒情詩「愛欲・離欲・処世に関する三百頌 śataka」を著した詩人バルトリハリ (Bhartṛhari) は、出家と還俗を何回も繰り返した、という伝説があるが、これもタントラ的な意味合いを持っているのであろう。伝説の真偽はともかくとして、抒情詩人バルトリハリは同名の優れた文法学者と同一人物であった、とされる。文法学者バルトリハリの神秘主義的言語哲学は、古代インドのタントラ思想に大きな影響を与えた。

14) grāmer-i「村の・こそ」接尾辞 -i は限定・強調を表すが、この例では「同じ」という意味になっていると思われる。

参考文献

Selīm, Mostaphā (Salim, Mustapha)

2018　*Sileṭi nāg'rīlipir sahaj'pāṭh*. Sileṭ: Śrīhaṭṭa Prakāś. (*Sylheti Nagrilipir Sohojpath*. Sylhet: Sreehatta Prokash.)

安藤　和雄

2019　「バングラデシュの宗教 ベンガル・デルタに在地化された宗教性」『エリア・スタディーズ 32 バングラデシュを知るための 66 章』【第 3 版】明石書店、77-82

石田　英敬

2020　『記号論講義 日常生活批判のためのレッスン』筑摩書房

外山　滋比古

2020　『思考の整理学』筑摩書房

村瀬　智

2017　『風狂のうたびと』東海大学出版部